

「日本の美」総合プロジェクト懇談会（第6回）

ジャポニスム2018総合推進会議（第3回）

議 事 要 旨

○日 時：平成30年6月22日（金）18：10～18：50

○場 所：官邸2階小ホール

○有識者：津川座長（総括主査）、内永委員、幸田委員、小林委員、林委員、森口委員

○政府等：安倍内閣総理大臣（議長）、林文部科学大臣、野上内閣官房副長官（議長補佐）、岡本外務大臣政務官、兼原内閣官房副長官補、宮田文化庁長官、安藤国際交流基金理事長（主査）

1 開 会

2 議 事

（1）ジャポニスム2018について

（2）ジャポニスム2019（仮称）の企画案の検討状況について

（3）意見交換

3 総理発言

4 閉 会

（司会：野上内閣官房副長官）

1 開会

2 議事

（1）ジャポニスム2018について

安藤国際交流基金理事長より、資料1・2に基づき、ジャポニスム2018について、説明があった。

（2）ジャポニスム2019（仮称）の企画案の検討状況について

安藤国際交流基金理事長より、ジャポニスム2019（仮称）の企画案の検討状況について、説明があった。

(3) 意見交換

次に、各委員等による意見交換が行われた。主な発言は以下のとおり。

【津川座長（総括主査）】

- 2020年の日本博の企画について推薦したい。2020年はテーマを「日本人と自然」として展開したいと思っている。なぜならば、日本の美意識には、縄文時代から現代まで連綿と続く一万年の自然観が色濃く反映されているからである。また、自然は全て左右非対称につくられているように、我が国の文化は、また、同じものが2つとしてない思想を大切にしてきた。
- それはまた、異質なものを排除しない日本文化独特の多様性の尊重ということにほかならない。この文化的価値観は、縄文以来一万年にわたり日本人が独自に育んできたものであるのと同時に、宗教や民族を超えて現代の世界への普遍的なアピールとする重要なメッセージともなる。これを一貫したテーマとして造形美術から舞台芸術まで様々な領域にわたって表現する日本博を開催するのはいかがか。
- 今回の日本博開催によって、日本の美の最も優れた部分を日本人に改めて再確認してもらうとともに、オリンピック開催とも重なり、海外から集まる観光客へも新たな認識をしていただくことができるに違いない。また、素人考えであるが、出展作品を決める識者グループ、出展場所と時期を決める識者、地方の首長グループ、少なくとも2つの分科会をつくって機能させなければならない。

【内永委員】

- 2018年、2019年と継続して、こういった具体的な取組が進み、これだけ素晴らしいものが出来上がったということに対して、事務局の方々、皆様方の努力に、本当に心から敬意を表したい。やはり、このような取組を継続していくということが、日本の文化や価値観といったものを世界の人に広く知ってもらうためにも極めて重要である。
- しかし、出展して皆様方に見ていただいて、よかったね、素晴らしいねで終わってしまったのは、とてももったいない。私が一番、力を入れなければいけないと思っているのは、こういった日本の芸術や文化的アセットといったことに対して、例えば、漆器にしても焼き物にしても歌舞伎にしても、それぞれの分野において、いわゆるスポークスパーソンとして対外的にも国内でも話ができるという人たちをどうやって増やしていくかということである。意

外と日本人が分かっていない。例えば、試験というのはおかしいけれども、そういった資格取得コースを開いて、日本の文化のエージェントとして広報活動をし、草の根運動を広げるということも、今回の活動の中で出てきたものとしては、非常に大事なのではないかと思う。

- 私は、幅広い女性のネットワークを持っている。特に女性たちにはこういったことを理解していただき、海外に行く機会の多い彼女たちが海外に行って、英語で日本の文化や伝統等いろいろなことを幅広く話し、このような活動を具体的に紹介するという裾野を広げる活動を、これからは是非やっていく必要があるのではないかと思う。まずは、皆様の御尽力に御礼を申し上げたい。

【幸田委員】

- 第1回の「日本の美」総合プロジェクト懇談会は、確か2015年の10月だったのではないかと記憶しているが、そのときに生まれた日本博というアイデアが、ついに結実するのだなという感慨に浸っている。
- 個人的な話で恐縮だが、このところ株主総会が続いており、ついさっきまでも某社の取締役会の席にいたので、国際社会に起きている貿易戦争だとか、報復措置だとかという騒がしく排他的な殺伐とした話題から、一転こういう「美」や「文化・芸術」という人間の共有できる価値観というか、相互理解というか、改めてそういった世界の素晴らしさと、必要性を実感させられている。
- こんな時代だからこそ、今のこの思いを海外の方と共有できるチャンスを実現していただける今回のジャポニスム2018の開催には、国民の一人としてとても感謝しているし、ここまでの関係各位の御尽力には、大変なものがあったと思う。改めて心から御礼を申し上げたい。
- こういうイベントは、開催が実現したらそれで成功、というふうに達成感を味わえるもので、それはそれでとても大事なことであるけれども、それが次につながるということこそが大切だ。その点においても、2019、2020とつながっていく道筋も見えて、とても嬉しく思っている。
- できれば、これがそういった日本の文化的遺産、芸術や文化的アセットの継承や後継者育成にまで発展してほしいと思うし、1つの力強いきっかけになり得る力を持っているものだと思うので、これからも国内で根付いて、それがまた次世代に継承されていくということのスタートになることを心から願っている。

【小林委員】

- 先週から今週初めにかけてフランスへ行き、パリに2日ばかり滞在したのだ

が、私の関係している美術展で伊藤若冲展をプチ・パレ美術館でやるということで、ちょっと散歩がてら会場を見に行ったところ、大変やりにくそうな会場であった。伊藤若冲の展覧会は、2年前に東京都美術館で大変成功した、そのメインのところを持っていくわけなのだが、その折りに、若い会場設営と照明のデザインをするデザイナーの方が大変上手に設営してくれた。多分、プチ・パレのやりにくそうなギャラリーを上手に設営してくれるのではないかと思う。

- これだけの多様なイベントを用意なさせて、私も大変感謝している。それぞれのイベントの主なソフト、これは日本側から発信できる重要な内容だろうと思うのだが、それを支えている裏方の方々や、デザインや味付けをなさる方々の繊細なプロジェクトが、多分、フランス人の心に届くのではないかと、そういう意味で、トータルな日本が送り届けられるということを期待し、また、成功を祈りたい。
- これだけの日本文化発信のプロジェクトというのは、前代未聞なのではないだろうか。大変な御努力だったと思うので、関係者の皆様に感謝申し上げます。

【林委員】

- 本当によくこういう若いとがった人たちまで網羅なさったと思い、ちょっと驚いた。安藤忠雄さんという建築の方もいらっしゃるし、河瀬さんもこんなふうに出ていらっしゃるってすごいと思うのだけれども、1つ言わせていただくと、私は作家なので、文学というところが全くないので、それが非常に残念である。
- 何年か前にパリの文化会館とニューヨークでそれぞれ講演をしたのだが、私レベルの知名度でも結構人が来てくださって、大半は駐在員の奥さんだったが、それでも何人かフランス人の方、アメリカ人の方がいて、非常にすごい質問をされたのを覚えている。今、文学賞の授賞式に行った帰りなのだが、かなりフランス、アメリカで翻訳されている人気の作家がいらっしゃる。やはり、何かちょっと彼らも参加させていただきたかったなというのが、私の正直な気持ちである。

【森口委員】

- 日仏友好160年ということだが、私は55年前のフランス政府給費留学生であり、160年の3分の1は私も友好にかかわっているのだなと感慨に浸りながら、今回の企画を大変嬉しく思った次第である。
- 2016年秋にはパリの日本文化会館で、私の作品展を開いていただいたのだが、

セーヴルという国立の陶磁都市と<クロス・トランスミッション>という共同事業を、ベタンクール・シュエラー財団の支援で行ったときでした。このジャポニスムの企画が、パリに伝えられたばかりで、現地の日本大使館をはじめ場所探しに右往左往される方々の途方に暮れた表情を思い出す。

- 今回、2番目の<クロス・トランスミッション>で、セーヴルに行き、今度はセーヴルの職人さんたちと一緒に2週間仕事をしたのだけれど、その事業の打ち上げの昼食会の席上、木寺大使から本日発表されたプティ・パレ美術館のことなど初めて聞いた。よくこの2年の間でこれだけのことができたものだ、大変感心している。
- 今、小林先生がプティ・パレ美術館のことを使いにくそうとおっしゃったけれども、とても格式の高いよい美術館で、私が初めて留学した1963年の秋に、アンドレ・マルロー文化相の肝いりで戦後初の「日本古美術展」が、東京国立博物館の協力で開催された場所であり、やはり私は何かの御縁のようなものを感じる。
- ジャポニスムというタイトルだが、2016年当時は、フランスのインテリたちは、昔のジャポニスムのことを思い出して、どうかなと批判的に言っていたのだが、最近、フランスの日本人好きがまた再燃しており、最終的にこのタイトルが一番よかったのではないかと思われている。つまり、昔のジャポニスムではなく、また新たなジャポニスムをつくることによって、日本が展開している状況を見ていただけるという意味でも、この名前以外になかったのではないかと思う。
- 私が、今回セーヴルでやらせてもらった<クロス・トランスミッション>のように、これからはこういった「もの」や「こと」が大きく動くと同時に、人と人との交流で、ソフトの交流がますます盛んになるような企画を組んでもらえると実りも大きいと思うし、私もそれに協力したいと思っている。

【岡本外務大臣政務官】

- 皆様の御発言を聞くに当たり、ここまで来るためにいろんな方の御尽力があったのだなど、大変感謝の思いをさらに強くした。
- いよいよ来月からジャポニスム2018が開催するが、私も1か月ほど前に出張でフランスに行ってきたのだが、フランス側の期待も大変高まっているということを感じた。この歴史的な文化交流の機会を通じて、日本とフランスの間の重層的な協力関係の拡大、さらにはEU、そして国際社会に向けた日本文化の発信に全力でつなげていきたいと考えている。
- 外務省では、来年も米国、そして東南アジアで大規模な日本文化紹介事業を実施する予定にしており、訪日観光客の増加、その後、オリパラに向けた機

運の醸成を図ってまいりたい。

- 先ほど、座長から御提案をいただいた2020年日本博についても、外務省として、全力で協力をさせていただきたいと考えている。
- 以上の取組に、私ども外務省としては、本日、御出席をいただいている委員の皆様お一人お一人、そして、文化関係団体、企業の方々、加えて国際交流基金や各省と連携し、成功に向けて全力で取り組んでまいりたいと思うので、引き続き御指導、よろしく願いたい。

【林文部科学大臣】

- ジャポニスム2018、また、2019については、日本文化の魅力や日本の美を世界に発信する重要な機会であるので、文化に関する施策の総合的な推進を所管する文部科学省としても積極的に協力をしてまいりたい。
- また、津川座長から2020年の事業実施に関する御提案があった。これについては、大変時宜を得たものであり、正式な今後の方針ということになれば、文部科学省としても関係省庁と連携の上で、必要な体制を構築し、しっかりと取り組んでまいりたいと考えている。
- 特に文化庁では、宮田文化庁長官の下で、抜本的な組織改編、そして、大幅な機能強化を進めている。京都移転も数年後に迫ってきているので、新文化庁ということで、総力を挙げて取り組むことにしたいと考えている。

3 総理発言

(報道関係者入室)

安倍内閣総理大臣より、以下のとおり発言があった。

2年前、この懇談会で芽吹いた「日本博構想」。委員の皆様の御貢献をいただき、誰もが想像だにできなかった大輪の花に成長し、いよいよ来月から「ジャポニスム2018」として、フランスで一気に咲き誇ろうとしている。

私自身、事情が許せば、来月パリで行われる開会式にマクロン大統領とともに出席し、日本の美をフランス全土、さらには世界に向けてアピールしたいと考えている。ジャポニスムの広報大使の香取慎吾さんにも御協力をいただき、ジャポニスムの魅力余すところなく発信をしたいと考えている。

「ジャポニスム2018」全体のコンセプトを表現する展示「深みへ」や、パリで11年ぶりとなる本格的な「松竹大歌舞伎」、さらには海外でも若者に人気の初音ミクのコンサート。これらの企画に、今から心を躍らせている。世界中の

たくさんの方に、日本の美意識を体感していただき、その感動を共有したいと思う。

2019年には「ジャポニスム2018」の後、勢いをかって、米国、東南アジアでの事業が予定されている。外務省・国際交流基金を中心として、関係府省の連携の下、全力を挙げて取り組むようお願いしたい。

それから、委員の皆様から御提案があった、この大会を成功させて、それで終わりということだけではなく、この大会を契機として、多くの方々、また、日本の皆さんに、この大会によって浸透し始めるであろう日本の素晴らしさをさらに草の根レベルで発信していくよう、どういう形がいいのかよく考えていきたいと思っている。

そして、2020年、本日、津川座長から、これらの取組の集大成として、世界中の人々が日本に来て、全国各地で「日本の美」を体感する企画、「日本博」開催の御提案があった。文部科学省・文化庁が中心となり、関係府省と連携し、万全、万端の態勢で進めるようお願いしたい。先ほど、今回の「ジャポニスム2018」で文学についての視点が欠けているのではないかと林委員から御指摘があったので、2020年においては、そうした指摘がなされることがないように、しっかりと取り組んでいきたいと思うので、よろしくようお願いしたい。

2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会は、世界中の関心が日本に集まる。この絶好の機会に、日本の魅力を最大限に発信し、日本を訪れる数多くの方々にこれを実感していただけるように取り組んでまいりたい。

委員の皆様におかれては、引き続き、御指導をいただきますようお願い申し上げます。また、関係企業・団体におかれても、今後とも御協力をよろしくお願いしたい。

(報道関係者退室)

4 閉会

最後に、野上内閣官房副長官より、以下のとおり説明があり、閉会となった。

○7月に迫った「ジャポニスム2018」の成功に向けて、政府一丸となって取り組んでまいりたい。引き続き、御指導のほどよろしくお願いしたい。

○本日の議論の内容については、ホームページに議事要旨を掲載させていただく予定である。

(以上)